

事例5

競い合う仲間がいることで、技術が向上する コンピュータ化進むなか、手作業の魅力を伝えたい



株式会社パワー
井橋由美子さん

刺繍に関する 企画・制作会社

同社の創業は明治の中ごろ。初代が和服の飾り縫いや刺繍を手がけて、2代目が絹の単糸を使った家紋やスワウ刺繍などに広げ、3代目は刺繍名人を目指して京都で修業をした後に刺繍教室を開くなど事業を展開。

戦後 1949 年になって会社を創設しミンを導入。50 年代になると、ジャカードなどコンピュータ刺繍機を導入し、ニッターなどに企画を提供する刺繍専門メーカーとして地保を固めるようになった。

「業務としては刺繍に関する企画・制作会社ということになり、新しい刺繍・模様などの企画をメーカーに提案し、採用されると製品の一部分に刺繍を加工することになります」と元4代目社長で現会長の渡辺剛博さん。

仕事はメーカーからの依頼だが、実際には縫製工場から刺繍部分だけの委託を受けて加工を行い、縫製工場が最終的なアパレル製品として完成させてメーカーに納品している。

横振りミンを使いこなす 高度な技能

最近ではコンピュータ刺繍機の技術も発達し、量が多い場合



はコンピュータで制作する。しかし、サンプル作りやロットが小さいものはどうしても人手に頼った手作業やミン作業にならざるをえない。そこで、威力を発揮するのが横振りミンと技能である。

「横振りミンは、日本で独自に発達した技術で、糸調子を合わせるのが大変で、使いこなすには熟練を要します。それだけに人間技の味のある表現ができるのですが、井橋は国内でも第一級の技能者です。何とか彼女の技を生かす仕事を、多くしたいと思っています」と渡辺会長。

横振りミンは送り歯が着いておらず、横にも振れるミン。フリーに動くので、自在に刺繍が可能で、糸替えに際して糸の調子を合わせるのが不可欠。

同社はまた、ラインストーンと呼ばれる磨き上げられた模造ダイヤの代理店でもあり、皮革に樹脂で接着した製品などもあり、そうした複合技術を使った靴、カバン、帽子などの仕事も多い。

多様化の時代こそ 高度な職人技を

「何か手仕事をしたいと思っていましたが刺繍をしたいと考えていたわけではありません。しかし、やってみて、はまってしまいました」と20 数年の経験を持つ井橋さん。

「刺繍は仕事というより先生活の一部になっています。ミンを使った細かな作業に集中していると気持ちが落ち着きます」といふ。

横振りミンを自在に操って見事な刺繍を刻んでいくが、最近はその技も、コンピュータ刺繍技術の向上で使う機会が少なく、技能伝承も不可欠になっている。

「模様は立体です。図面は平面ですが、それを見て立体のイメージが浮かぶかがどうか重要。イメージどおりに仕上がるとうれしいですね。たくさん仕事を頂いて、みんなで競い合いながらやりたいですね」と井橋さん。若手技術者の育成も重要な仕事になっている。



同社
渡辺剛博会長

